

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 李 永 晶

本論文は、1980年代以降の現代中国社会の「社会認識」に焦点をあて、その複合的な系譜と固有のメカニズムを考察したものである。ここでいう社会認識とは、「社会的なるもの」のとらえ方であり、「社会」「国家」「文化」など社会学的な研究の前提を構成する諸カテゴリーの複合体である。先進工業社会の理念や経験をそのまま導入しようとする比較や、中国社会を例外的で固有のものとしてしまう文化論などとは異なる立場から、現代中国の知識人たちが語っている「社会的なるもの」をめぐる規範的目標や経験的基準の再検討という課題を掲げる。そして公式イデオロギーとしての中国マルクス主義の構造とその変容、現代化をめぐる市民社会論、ナショナリズム論、儒家文化論などを幅広く分析し、その複合的な様相を明らかにしている。

第一章では、「知の社会学」という立場をとる戦略的な意味について、イデオロギー論や知識社会学、言説分析などの方法的立場を検討しつつ、知識人が作り上げた現代中国の言説空間という対象を設定している。第二章では、改革開放政策が始まった1978年以降における言説のなかから、中国マルクス主義の基本認識に焦点をあてる。そして中国マルクス主義が社会再組織の原理であり、「現代化」が理念的というよりも経験的な社会変動として設定されていること、文化大革命の收拾と批判、社会主義制度の正統性および改革開放政策の正当性の確保といった課題が、「実践」という主体的な概念をもとに結合されていること、さらに「文化」という領域が争点として浮かび上がってきたこと等を分析している。第三章では、「革命」「現代化」「現代性」の言説を検討しつつ、現代化をめぐる理論が複数化しつつあること、そのなかで中国マルクス主義の相対化と再構成とが行われつつあることを描き出す。ここで摘出された論点は、第四章の中国における「市民社会」論の成立とその理論的な類型化や、第五章のナショナリズム言説の諸様相とりわけ「天下主義」のなかの儒家文化要素等々の主題群へと関連づけられ、第六章の1990年代以降の儒学の復興をめぐる言説のなかの社会認識の分析へとつながっていく。最終章では、こうした言説空間の主体である知識人の社会的な位置づけの歴史的変遷に及び、権力／知／真理の複合体としての「真理体制」の再編における公共知識人論の重要性で、全体の考察を結んでいる。

「党」を含めた制度の調査研究に踏みこむなど更なる展開を期待したい部分もあるが、市民社会論からポストモダンまで欧米の理論の系譜を誠実に押さえ、中国での多様な議論を大胆に整理し、新たな見通しを与えた意欲的な研究として高く評価できる。現代中国社会における社会学的想像力の復権という観点から見ても意義深い論点を多く提出しており、著者自身を含め今後の研究の基礎となる優れた貢献である。本審査委員会は、博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。